

Reinterpretation of Tada-Verb-ni-Verb Construction in Old Japanese Teaching Materials

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46354

古文教材における「タダ+動詞+十動詞」型の扱い

—「ち」のそら寝」の「ただくひにくふ」等—

Reinterpretation of Tada-Verb-ni-Verb Construction in Old Japanese Teaching Materials

近藤 明
KONDOH Akira

一 はじめに

上代から中世前期頃までによく見られる「タダ+動詞+十動詞」型の形式については、既に山田孝雄（一九三六）で、

どしや降りにふる。

ひた泣きに泣く。

ただ食ひに食ふ。

などいふ時には、その「どしや降り」「ひた泣き」「ただ食ひ」が、下の「降る」「泣く」「食ふ」こと形容たること極めて明かなるべし。

（p四二三）

という指摘がされている。その後関谷浩（一九七一）は、アクセント、連濁の生じる位置、ローマ字書き文献での分ち書きのしかた、「タダ+動詞+二」の後に他の成分が介在し得ること等、具体的な論拠をあげてこの点を立証しており、主要な論拠は同論文で悉されていると云ってよい。

『例解古語辞典』（三省堂）は、高校生が使用するようなサイズの古語辞典であるが、初版の一九八〇年という時点で、

「ただ泣きに泣きけり」となどという言い方で、「ただ」が「泣きに泣

きけり」にかかるとみるのは誤り。（接頭辞「ただ」の項「要説」）
これら（引用者注：「ただ食ひに食ひまぎらはししかば」「ただ冷えに冷え入りて」等）は、「ただ食ひに」「ただ冷えに」であとの「食ひ」「冷え」の状況を修飾するもので、（中略）（同：「下消えに消えて」「思ひ寝に寝し」の）「下消えに」「思ひ寝に」と同じことである。（格助詞「に」の項「要説」）

と、丁寧かつ適切な説明をしている。

より早く『新明解古語辞典』（三省堂）は、補注版（一九七四年の第二版を使用）の「ただ」の項の補注で関谷浩（一九七一）を紹介し、本文でも品詞を接頭語とした上で「（ただ）+動詞連用形または形容詞語幹+「に」の形で」（する）。ひたすら…（になる）。」としているが、補注のない一般の版では意図が十分には伝わりにくかったかもしれない。

その後、亀井孝（一九九四）のように知名度の高い研究者が平易な形で述べたものも現れた（1）こともあって、国語学の特に歴史的分野の研究者の間での認知度は高くなっていると思われるし、島田泰子（二〇〇八）、青木博史（二〇一〇）のような新たな観点からの研究も現れている。近年では小田勝（二〇一五）が、関谷浩（一九七一）を挙げ

て「ただ、泣きに泣きて」ではなく（中略）「ただ泣き」で一つのかたまりを作る」としているのも、妥当な紹介・説明と言える。

筆者は近藤明（一九九四a）でこのことを前提とした上で、「ただ泣きに泣く」の類は

動作・変化の一連の過程が、遅滞・中断といった時間的隔たりなしに、開始・進行・進展し、完結する。

といった意に解されるとの見解を述べた。また「タダ」等を伴わない「泣きに泣く」の類をφ型と呼んだ上で、これらは

「動作の継続・反復（場合によっては主体・対象の多数性・大量性）・激しさ」「主体・対象の変化結果の著しさ」

等を強調的に表すと解され、外見上よく似ている両者の意味が、必ずしも重ならないものであることを論じた。なお後者のφ型は現代語にも存在するが、右のような点ではほぼ古代語と大差ないように見受けられた（近藤明・近藤仁美（一九九三））。

一方、古典文学の研究者、更に国語教育関係者の間でこのことに関する認知度は、未だ必ずしも高いものとは言えない状況のようである。例えば秋山虔編『源氏物語大辞典』（角川学芸出版）では「言ひに言ふ」の項目を立て、宿木巻の「ただ言ひに言へば」の例を引いて「言ふ」の強調表現」としており、φ型と「タダ」型の区別に無頓着とも思われる扱いである。

本稿は、高等学校の古文教材としてよく用いられるものに現れる「タダ＋動詞＋十動詞」型（以下「タダ」型と略すこともある）について、教科書・参考書・注釈書・一般読者を想定した古文関連の書籍等における扱いを瞥見し、現状と問題点についていささか考察しようとするものである。

以下、「タダ＋動詞＋十動詞」型の現われる古文教材のうち、教科書で広く使用され、また古文入門期の教材として、逐語的現代語訳が

付された形で掲載されることが多い（従ってそれが適切性を欠いたものである場合、影響も大きいと考えられる）ものをまず取り上げ、逐次その程度の薄いものへという順で進めていくことにする（ただし「附」で取り上げる今昔物語集の例は、本文批判の問題も含んでおり他とはやや性質を異にするところがあるため、この配列順によらなかつた）。

二 宇治拾遺物語の「たゞくひにくふ」

宇治拾遺物語卷一の第十二話「児ノカイ餅スルニ空寝シタル事」と題されている説話は、国語教科書では「ちこのそら寝」等と題されて古文入門期の定番教材となっている観がある。その末尾近く、僧たちが「かひもちひ」^①を食べる様子を表すのに、

①ひしひしとたゞくひにくふ音のしければ、ずちなくて、むごの後
に「えい」といらへたりければ、僧たちわらふ事かぎりなし。

（伊達本を底本とする『三本対照宇治拾遺物語』武蔵野書院による。問題の箇所以外は適宜表記に手を加えた）

と、「たたくひにくふ」という表現が現れている。前節に掲げた

動作・変化の一連の過程が、遅滞・中断といった時間的隔たりなしに、開始・進行・進展し、完結する。

という近藤明（一九九四）での考えによつて解釈するとすれば（こゝでは「完結する」段階にまでは至っていないが）、「たたくひにくふ」は、途中で食べるのをやめたり、一休みしてもう一度ちごを起こしに行くといった気配がないままどんどん食べ進める様子を表す、ということになりそうである。

島田康行（一九九六）は、この形式による表現の特質を「その行為・動作などが、関係者の意思や反応あるいは周囲の状況とは無関係に行

われることを強調する点にある」とし、「その結果が関係者の不愉快・迷惑・困惑などを招来しやすい」としているが、確かに当該の用例でも、事態はちこの意思とは無関係に進んでいき、しかも右のような食べ方では、限りある量の「かいもちひ」が、ちこがありつく機会のないまま間もなく無くなってしまいそうで、じりじりしながらその様子を聞いているちこの、困惑・焦燥の念も伝わってきそうなどころである。

この「ただくひにくふ」に、例えば「むしやむしやと、みんながどんどん食べる音がしたので」(明治書院『高校生の国語総合』平成十八年検定 初版平成十九年。平成二二年四版による)と「どんどん食べる」という訳をあてているものがあるが、これは簡潔ながら現代語訳としてはそのニュアンスが比較的よく反映されたものと言えよう。また「むしやむしやとおかまいなしに盛んに食う音がしたので」(東京書籍『新編国語総合』平成十四年検定 平成十八年発行版による)の「おかまいなしに」も、右の「途中で食べるのをやめたり、一休みしても一度ちこを起こしに行くといった気配がないまま」といったあたりに対応している訳と言えそうである。

一方「ただもう盛んに食べる音がある」(旧日本古典文学全集集)、「ただただ食べに食べている音がする」(新編日本古典文学全集)、「ただひたすら食べに食べる音がしたので」(第一学習社『高等学校国語総合』平成十四年検定 平成十七年発行の版による)等、「ただ(もう・ひたすら)の後に「食べるに食べる」を続ける訳をあてる向きも見受けられる。これらは原文の「ただ」が「食べるに食べる」に係るという意識が背景にあると見られるが、これらの訳でも、「ただもう」や「ただひたすら」で脇目もふらず動作に専念するニュアンスは伝わりそうではある。それならば訳として一応の用は足りているし、そのような

訳が与えられているのであれば、「ただ」が「食ひに食ふ」に係るのであれ、関谷浩(一九七二)等で言われてきたように、「ただ食ひ」が「食ふ」に係るのであれ、とりあえずは音読する際にどこで区切るかというだけの問題であつて、高等学校古文のレベルではそのようなことにはさほどこだわる必要はないのではないかと、いう意見も出てきそうなどころである。

しかしながら第一節でも述べた通り、 ϕ 型の「食べるに食べる」は現代語では、

(ホテルのバイキングに)大相撲の力士たちも若い弟子を連れてきたが、食欲がすごい。食べ放題という新しいスタイルだから、お腹をすかせて食べに食べる。

(村上信夫『帝国ホテル厨房物語』)

日経ビジネス人文庫 一三六(15)

のように多量性の含みがある場合が多いように思われる。

先に「ただくひにくふ」の解釈として示した「途中で食べるのをやめたり、一休みしても一度ちこを起こしに行くといった気配がないままどんどん食べ進める」にしても、そのような食べ方をすれば「食べ物が十分な量がある限りは」結果的に大量に食べることになるとも言えよう。だが先に示した「ただくひにくふ」の解釈では重点はそこにあるのではなく、必ずしも食べる量が大量である必要はない⁽³⁾。「ただ(もう・ひたすら)食べるに食べる」系の訳では、現代語の「食べるに食べる」からの類推が働いてしまい、その辺のニュアンスが微妙に異なつて受け取られてしまう恐れがあるのではないか。そうなると、とりあえずは音読する際にどこで区切るかだけの問題、というように大らかにすませてよいことも、筆者には思われないのである。

また「むしやむしやと盛んに食べる音がしたので」(桐原書店『展開国語総合改訂版』平成十八年 平成二二年版による)、「ひたすらがつ

がつと食べることをいうようです(田中貴子(二〇〇七))³⁾といった、音を立てる激しい食べ方に重きを置いたような訳・解説も見られる。これは「ひしひし」というオノマトペが伴うことが大きいであろうが、やはり現代語の「食べに食べる」からの類推による面もあり思うに思う。第一節で述べたように、古代語・現代語ともφ型は「動作の激しさ」を表す面があると思われる、「食べに食べる」からは「大きな音を立てるなどしてがつがつ」といったニュアンスも感じられそうである。また当該の場面にしても、「たゞくひにくふ音」とあり、またちこがその気配を感じたことからしてもある程度の音は立てて食べたには違いない。だが先に示した「ただ食ひに食ふ」の解釈では、大きな音を立てる激しい動作ということに重点があるわけでは、やはりなかった。また非時の食事であることを思うと、誰はばかることなく大つぱらに行うことのできる行為とも思われぬ。「ひしひし」とは大きな音を表す場合もあるが、

② ひしひしと思しめしたたせ給ひけり。

(覚一本平家物語 巻第四 源氏揃)

旧日本古典文学大系 上二八一⑪)

など、密度の高い動作・滞りのない動作を表すとも言えそうな場合もあるように思われる⁵⁾。

現代語のφ型「食べに食べる」からの類推が働きがちな区切り方を避けることで、大量性とか動作の激しさといった解釈に誘導されてしまう可能性を減らすという意義は、高等学校レベルにおいてもある程度認められるのではあるまいか。

ちなみに山内洋一郎(一九八〇)は、「たゞくひにくふ音のしければ」の直後に、児の心情を表す形容詞として現れる「ずちなくて」(書陵部本・陽明文庫本・蓬佐文庫本・九州大学本・伊達本等)もしくは「ず

べなくて」(寛永頃古活字本・万治二年整版本)に着目し、本文校訂の上では「ずちなくて」の方が遙かに優位に立つとした上で、「ずちなし」は「どうにもならぬ切迫した状況で、解決の方途が見出されず、心の悶々と悩むさまをあらわすのが中心義である」から、この場面は「児は、もうあかんとあきらめてしまったのではなかった。かひもちひの欲しさ、恰好よくしたいブライドの葛藤の中で、小さい胸を切なく痛めていた。そして堪えられなくて「えい」と機を失した声を挙げたのである。

と解すべきであるとしている。「たゞくひにくふ」を、本節で述べたように解するとすれば、ちこにとつては今にも「かひもちひ」がなくなってしまうそうだというまさに「切迫した状況」であり、一方で「待ちけるか」と思われずに格好よく「かひもちひ」にありつきたいとも思つて葛藤するちこの心情を表すのに「ずちなし」は極めてふさわしい語ということになる。

三 竹取物語の「たゞしれにしれて」等

竹取物語で、天人たちがかくや姫を迎えに来て昇天するまでの一部始終を述べる部分も、「かくや姫の昇天」等と題されて、古文教材とされるのが少なくない。その中の、天人の姿を見た人々が戦う力をなくしてしまう様子を描く場面に

③ 内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひ戦はん心もなかりけり。(中略)中に心さかしき者、念じて射んとすれども、ほかさまへ行きければ、あれも戦はで、心地たゞしれにしれてまもりあへり。(旧日本古典文学大系 六三⑦)

という描写がある。内省の利かない古代語であるだけに、「しる」が動作を表す動詞か変化を表す動詞かはつきりしない面もあるが、仮に精

神状態等の変化を表す動詞と考えておこう。教科書の中には「ただもうぼうつとしてしまった」（右文書院『国語総合』平成二二年発行版）という訳を脚注に掲げるものがあるが、これは「変化結果の著しき」を思わせる訳である。他に注釈書類における「氣持がただもうぼんやりしてしまって」（旧日本古典文学大系）、「氣持がただもうぼんやりするばかりで」（室伏信助『新版竹取物語』角川文庫 二〇〇一年）、
「氣持ちが、ただぼんやりとするばかりで」（大井田晴彦『竹取物語 現代語訳対照・索引付』笠間書院 二〇一二年）といった訳も、同様の方向性の訳と見られようか。これらも原文の「ただ」が「しれにしれて」に係るという意識が背景にあるもののように思う。

一方、第一節で示した考え方で解釈すると、心地が「しれ」ることが（中断したり、「念じ」た甲斐あつて力が入ってきたりすることとなく）、一方向的に進展する、の意ということになる。前掲の島田康行（一九九六）の考えを適用すると、氣を取り直して戦おうといった関係者の意志とは無関係にそうなってしまうということから、意に任せない焦りや無力感をも読み取られそうなどころであるが、右のような訳ではそのニュアンスが感じられないことになってしまうのではないか。

更にこれに続く場面で

④たてこめたるこのころの戸、すなはち、たゞあきにあきぬ。

（同 六四⑥）

という描写があるが、この訳として「即座に、ただもうあきにあいてしまう」（『新版竹取物語』角川文庫。「重要語句索引」には「開きに開く」も）、「たちまちにすっかり開いてしまった」（『竹取物語 現代語訳対照・索引付』笠間書院）といったものが見られる。

そもそも「開く」が（特に現代語で）φ型の「開きに開く」という形になるかという問題もあるが、強いてこの形をとるとすれば、その

解釈は「すっかり開いてしまう」といった「結果の著しき」の意寄りの方が想起されるところであろう。『竹取物語 現代語訳対照・索引付』の訳はまさにそれであるし、角川文庫の訳もそちらの解釈に誘導する結果になりそうなのである。

結果的に「すっかり開いてしまった」ことに変りは無いにしても、ここも今までと同様の考えで解釈すると、戸の開く動作が途中で中断したりもとの通りに閉じたりすることなく、進展したの意で、それを不思議に思いながら見守るしかない人々の、阻止したい・開かないでもらいたいと思ひながら意に任せない無力感も伝わってくるということになるが、右のような訳ではそのあたりが伝わらないのではあるまいか、

四 源氏物語夕顔巻の「ただ冷えに冷えいりて」

源氏物語夕顔巻で、「なにがしの院」で夕顔が急死する場面は、「廃院の怪」等と題されて、高等学校の教材としては比較的高学年を対象に用いられることが多いが、そこにも次のように「ただ冷えに冷えいりて」という表現が見られる。

⑤添ひふして、ややおどろかし給へど、たゞひえにひえいりて、息はとく絶えはてにけり。（中略）つと抱きて「あが君生きいでたまへ。いとみじき目な見せたまひそ」とのたまへど、ひえいりにたれば、けはひものうとくなりゆく。

（源氏物語大成 一二五③）

教材としては、高学年対象の教科書に載ることが多いものだけに、①の例等とは違って、教科書ではほぼ逐語的な口語訳が付されていることはあまりないようなので、参考書類にも目を向けておく。この箇所に関しては「ただどどん冷たくなつていって」（旧日本古典文学全集）

あたりが比較的無難な訳といえそうで、高校生向けの郷衡『明解シリーズ9 源氏物語(上)』(有朋堂 一九六八年初版)が、下段の「口語訳」で「ただもうつめたくなくていくばかりで」としているのも、それ自体は無難な線とも思える。もつとも後者は、『重要語句』で「ただ」を「ひたすら」、「冷えに冷え入りて」を「ただもう冷たくなって」と注する点、「ただ」が「冷えに冷え入る」に係っているとの見方に基づいているようであるし(初版が関谷浩(一九七二)以前でやむを得ないとも言えるが)、「ただ」を「ひたすら」と注するのも、「ひたすら」は「一生懸命に努める様子を形容する」(森田良行『基礎日本語辞典』角川書店)とされるように意志的動詞に係るという語感を有している者には、違和感が残りそうである。

角川文庫(玉上琢弥)も、初版が関谷浩(一九七二)以前と古いこともあるが、「すっかり冷えきって、息はとつくに切れてしまっていた」という訳で(これの母体となったと思われる『源氏物語評釈』も同様)、やはり高校生向けの西谷元夫『明解シリーズ6 源氏物語』(有朋堂一九七七年初版)も「ただもうすっかり冷え込んで」としている。またいわゆる自習書の類の現代語訳にも「ただもう冷え切って」『教科書ガイド 三省堂版 高等学校古典B 古文編 第二部』(文研出版 二〇一四年)とするものがある。この「冷え切って」「冷え込んで」という訳も、現代語の♀型の「動詞+十動詞」型からの類推が働いているのではないかと思われる。現代語で「冷えに冷える」という組み合わせはそもそもあまり見受けられないようでもあるが、強いて存在を想定すると、「冷ゆ」ないし「冷え入る」といった「主体の変化結果の著しさ」の意に相当しそうで、それに対応するのが「冷え切って」「冷え込んで」という訳ということになるのではないか。

だが、これでは息が絶えていることに気がついた時点で体温もすっかり冷え切っていたということになる。息や脈が絶えた時点でもしば

らく体温は残っており、それがすっかり冷え切るのは何時間か後、というのが通常であろう。

一方、ここまで示してきた「タダ」型の解釈を適用すると、「冷えている」ことが一方向的に進展し、その進展がとどまったり、まして容器が持ち直したりはしない様子を表していることになる。「やや」とおどろかすといった光源氏の努力も甲斐なく、ただ冷えいつていく一方という状況の中、源氏の困惑・焦り・無力感が伝わってくる場面、とも言えよう。その辺の心情も読み取らせたいところなのではあるまいか。

なお山口康子(一九七八)は、中世頃までのこれらの形式について、「非日常的・超現実的な場面においてまさにそのクライマックス的局面に集中して用いられる」「当事者にとつてよくない結果をもたらす事態の表現に偏って用いられ、従っておおむね否定感情―絶望・拒否・困惑・当惑など―を伴っている」といった指摘をしている。「タダ」を伴わない♀型や、「嬉し泣きに泣く」の類をも総括しての論であるため、どこまでが特に「タダ+動詞+十動詞」型に当てはまることなのか、しぼりきれない憾みはあるが、島田康行(一九九六)の論旨にもつながるものであるし、「人事的葛藤場面」「困惑・当惑」といったことは、本稿でここまで検討してきた用例①③④⑤にも該当する。ただ、「好ましい結果をもたらしているわずかな事例もそれが異常な好運であるという緊張感が著しい」とするが

⑥おに屏風のたかきをいとよく進退して、疊などをうち置くと見れば只局に局たて、犬防に簾さらさらと打かくる、いみじうしつきたり。やすげなり。

(二)三巻本枕草子「陽明文庫本」「正月に寺にこもりたるは」段

『校本枕冊子』一二四段52)

という例は手際よく「つぼね」を作っていく様子の描写で「異常な好

運」とか奇瑞というようなものではない。また

⑦ (水の精を) 苧縄ヲ以テ只縛リニ縛テ、高欄に結付ツ。

(今昔物語集 卷二七第五 旧日本古典文学大系④四八四⑤)

は「水の精」と題して明治書院『精選 新国語Ⅰ 古典編』等に収録されているが、状況自体は非日常的ではあるものの、手際よく縛り上げていく様子の描写である。右の指摘が当てはまらない例が(少数ではあるとしても)存在することは、既に島田康行(一九九六)においても指摘されていることではあるが、留意しておく必要があるかと思ふ。

以上述べてきたことをとりわけ古文を教える教員に留意していただきたいことという観点から「まとめると次のようなことになる。」

○ここまで取り上げたような古文教材における「タダ+動詞+動詞+動詞」型は、「タダ」で切って、それが「動詞+動詞+動詞」を修飾する、といった見方をするのではなく、国語学・日本語学の研究成果を踏まえて、「タダ+動詞+動詞」が「まとまりになって下の動詞を修飾するものと見るべきである。」

○右の点は、単に音読する際にどこで切るか、といっただけの問題にとどまらない。解釈にも少なからず影響するものであり、人物の心情等を十分に読みとれるか否かに関わってくる場合もある。

附 今昔物語集の「只(亦) 寄りニ寄来レバ」

本節で取り上げる例の場合、本文批判の問題等他の例とはやや異質の議論も含まれるところから、本節を前節に続く第五節とせず、「附」とした次第である。

今昔物語集卷二八第二八の説話に次のような箇所がある。

⑧ 此ノ舞フ尼共、此ノ木伐共ヲ見付テ、亦寄りニ寄来レバ

(今昔物語集 卷二八第二八 同⑤九七② 底本東大本甲)

旧日本古典文学大系頭注では、「この「亦」は「只」の意・もしくはその譌(中略) どんどん近付いて来たので」とする⁶⁾。確かに、ここを原文のまま解すると、「亦寄」という状態で「寄来」たので」ということになるが、それではもう一つ意味が通じ難いのに対し、「只寄り寄来レバ」の意だとすれば、木伐たちを見つけたやただちに近寄りはじめ、途中で方向を変えたり近づくのをやめたりするといった気配がないまま(女性の足であり、しかも舞いながらだから、動作の速度自体は必ずしも速くはないとしても、どんどん近づいて来る様子を表すと解され、意味がよく通じることになる。またこの後「木伐人共極ク怖シトハ思ヒ乍」とあり、山口康子(一九七八)の言う「人事的葛藤場面」「困惑・当惑」、島田康行(一九九六)の言う「関係者の不愉快・迷惑・困惑」とも合致する。

旧日本古典文学大系頭注は、今昔物語集における「只」の意・もしくはその譌」と見られる「亦」として

⑨ 王、娘亦一人有リ、(卷六第五 ②六三⑩ 底本東大本甲)
⑩ 亦死ナムコトヲ待テ、四五日有リ。(卷二十第十一 ④一六六④ 底本実践女子大本)

を挙げる。これらは確かに「亦」の意で解釈しようとしても理解し難く、「只」と同様の意とすると容易に理解できる。しかし、「亦」を「マタ」と読むものとして、今昔物語集以外の文献、特に仮名書きの文献で「只(タダ)の意に解される「マタ」の例の存在が知られていないのが、気にかかるところである。

残るもう一つの可能性としては、「只」が「亦」に誤写されたということであるが、

既成の知識をもとにして、それに合わない事実をすべて書きあや

まりとして訂正していったのでは、発見も進歩も期待できるはずがないのである。(中略)いろいろな考えてみたうえで、なお解釈のつかない場合に、はじめて、誤写の可能性を、おすおすと提出すべきであろう。
(小松英雄(一九七九) p六九)

という指摘を踏まえつつ慎重に考えるべきところであろう。ここまでのことを整理すると

○用例⑧⑨⑩とも「亦」のままだと文脈に整合した意味に解し難い。

○一方「只」だとすると、文脈によく適合した意味に解し得る。

○「亦」の意の「只」の存在に確証がない。

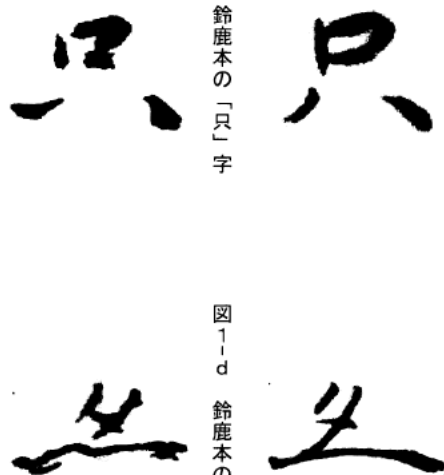
○「亦」と「只」の字形は、図1-a、dに東大本甲(紅梅文庫本)と鈴鹿本における例を示すように、酷似と言うほどではないが、場合によってはある程度の類似性がある字形になる(7)。
といったことが挙げられる。

図1-a 東大本甲の「只」字

図1-b 東大本甲の「亦」字

図1-c 鈴鹿本の「只」字

図1-d 鈴鹿本の「只」字



一方、用例⑧⑨⑩いずれも、古本系の鈴鹿本が存在しない巻であることから、一層の慎重さが求められそうであるし、問題の用例⑧であれば、今昔物語集に他の用例が無さそうな「亦十動詞十二動詞」を、用例の多い「タダ十動詞十二動詞」に書き間違えたのなら自然とも言えるが、なぜ逆の方向の誤写が生じたのか、という問題もありそうである。

ここでもう一つ考慮に値すると思われるのが⑧⑨⑩いずれの例も、用例の直前か、直前ではないにしても同一説話中の先行文脈に「亦」字が出てくることである。用例⑧では旧日本古典文学大系本で一行前に、「天狗ニヤ有ラム、亦鬼神ニヤ有ラム」と「亦」字が存在する。用例⑨では旧日本古典文学大系本で七行前、写本(東京大学国語研究室資料叢書『今昔物語集 二』)によった)で当該用例(図2-b)の九行前に「亦、行末ノ道遥ニ遠シ」(図2-a)と、用例⑩では旧日本古典文学大系本で七行前に、「亦龍ノ栖トシテゾ有ケル」と、「亦」字が存在する。これに目移りしたり、これがいわば心理的な残像となったことが、「只」を「亦」に誤写する引き金となったことは考えられないだろうか。

図2-a

老^{ラウ}来^{ライ}道^{ドウ}難^{ナン}堪^{カン}身^ミ羸^{レイ}力^{リキ}衰^{サイ}亦^オ行^{コウ}未^ミ道^{ドウ}遥^{ヤウ}

図2-b

聖^{セイ}人^{ジン}王^{オウ}言^{ゴン}實^{ジツ}巴^ハ思^シ給^{キョウ}也^ヤ事^ジ受^ウ給^{キョウ}王^{オウ}娘^{ニョウ}亦^オ人^{ジン}

また、旧日本古典文学大系頭注は「逆に、「只」が「亦」と同義に用

いられる例」として五例を挙げるが、うち

⑩只、孔子、諸ノ弟子共ヲ引具シテ道ヲ行キ給ケルニ

(巻十第九 ②二九〇⑦ 底本鈴鹿本)

は、日本古典文学大系で二行前、底本の鈴鹿本で一行前に「只者二ハ非又者也ケリ」と「只」字が現れている。(図3)

図3

極ノ味ヲ在トシ孔子此ヲ聞テ此ノ三人ノ董ク感テ只者ハ只者也トテ讀ム繪ト昔ハ小兒モ如此ク賢ク只孔子諸ノ弟子共

他に巻十九第三、巻十九第四の二例も、これよりは離れた行ではあるが、同一説話内の先行文脈に「只」字が現れている。残り二例のうち「只董ニモ問事无」(巻二十第四五 ④二二五⑥ 底本実践女子大本)は、一つ前の説話に「只壞ニ令壞テ」(④二二四⑤)等と「只」字があり、全く該当がないのは「亦此介ガ弟モ」(巻二六第五 ④四一七⑫ 底本内閣文庫本A)だけであって、⑧⑨⑩の場合と同様の事情が想定されはしないかと思う。

以上を総合的に判断し、小松英雄(一九七九)の顰に倣うならば、「誤写の可能性を、おぼえずと提出」することが考えられてよい例とすることになるか。

なおこの説話は、高等学校古文教材としては三省堂『古典講読 本の説話』(平成七年検定 教科書センター用見本を使用)に収められているが、当該箇所は「ただ寄りに寄り来たれば」となっている。同教科書は今昔物語集については新潮日本古典集成によった旨記されているおり、同集成では当該箇所の本文「只寄りに寄り来たれば」とあ

るので、直接的にはそれによった結果であるうが、教科書としては適切な一少なくとも当を失しない範囲内の一措置と考える。

注

(1) ただし亀井孝(一九九四)が、「夕汐、ただ、満ちに満ちくる」のように「ただ」が「満ちに満ちくる」に係るとする見方への疑問点として挙げているものは、いずれも関谷浩(一九七二)において明確に論じられている点である。講演という性質上、必ずしも先行研究への十分な言及ができなかった面があるのかも知れないが、少なくとも単行本収録時には配慮がなされてしかるべきだったと思われる。

(2) 当該の説話に表われる「かいもちひ」については近藤明(一九九五)でも論じたことがあるが、田中貴子(二〇〇七)は、「箸でつかみにくく食べるのがある程度時間がかかり、一人何個と決められることのないそばがきの方がこの場面にはふさわしいのではないか」ということを「そばがき」説の根拠に加えている。そばがきとおはぎのどちらが食べるのに時間がかかるかはともかく、瞬時に食べ終わるような量・形態のものでないことは言えるであろう。

なお田中貴子(二〇〇七)は、「そばがき」説の根拠の一つとして、小豆餡が宇治拾遺物語以前の文献に見いだせないことを挙げているが、おはぎ状の食品に甘い小豆餡を必須と見る必要があるかは疑問に感じる。例えば『日本の食生活全集⑩聞き書石川の食事』(編集代表守田良子 農山漁村文化協会刊 一九八八年)は、「大正の終わり頃から昭和の初めころ」の石川県の食生活を再現したものであるが、それによると加賀平野・松任での「かいもち」は、「炊いたもち米をつぶし、おにぎりのように丸め、あんこやきな粉をつけたもの」というおはぎ状のものが、「小豆餡の」足りない分はきな粉や黒ごまをつける」とのことであり、能登外浦・鶴入でも「小豆のつぶしあんや青豆(青大豆)のきな粉をつけ」たとのこ

とである。現在「おはぎ」として市販されているものも、小豆餡だけでなく、右のようなきな粉やごまをまぶしたものもあるのではないか。

福田秀一(一九六四)は「餅酒歌合」に「かいもちひ」を含めて各種の「もち」「もちひ」が詠み込まれていることに着目し、それらから察すると「かいもちひ」も「餅の種類もしくは料理法の名称であって、「そばがき」の意とは考へられない」としている。この問題を(とりわけ文学分野の論者が)論じる際に言及されることが多いようであるが、同歌合に詠み込まれている「もち」「もちひ」の中に「蕨のもち」が含まれていることに注目したい。福田論文のいう「餅」は臼と杵でついた餅からおはぎくらいのまでの範囲を指すものようであるが、同歌合の「蕨のもち」が、今日の「わらびもち」のように「澱粉に水を加えて、火にかけて練り、冷やし固めて適当な大きさに切ったもの」(『日本国語大辞典第二版』)であるならば、右の範囲に収まるものであるのか、それをやや拡張する必要があるのか(筆者の感覚では後者)、議論の余地があるように思う。

(3) 注(2)でも述べたように、「かひもちひ」の量はほんの一口で食べ終わるようなものではない—それでは説話が成立しないであろう—ことは確かだが、「宵のつれづれ」の間食であるならば、さほど大量に用意してあるとも考えにくいのではないか。

(4) 田中貴子(二〇〇七)はP三五による。同書P二四に掲げられた訳は「ただひたすら食べに食べる音がしたので」という前掲の第一学習社『高等学校 国語総合』と同じものであるが、こちらは本文を「現行の教科書からそのまま採りました」として同教科書に基づいた本文を示し、下段に一般的な現代語訳を示している中でのもので、この「一般的な現代語訳」は何かに基づいたものであるのか否か明記されていないが、当該箇所については同教科書に掲げられている訳を踏襲したものか。

(5) 『時代別国語大辞典室町時代編』「ひしひし」との項は、「物事が手順を踏んでとどこおりなく進められるさま」として、信長記やお湯殿の日記の

例を掲げる

(6) 旧日本古典文学大系頭注で言う「譌」は、「訛」の本字ということと、「いつわり」「なまり」の他「あやまり」の意がある。

(7) 東大本甲本は東京大学国語研究室資料叢書(汲古書院)によったが、用例⑧の説話が収録されるであろう『今昔物語集 七』が未刊であるため、鈴鹿本も存在する巻の用例である後掲の用例⑩の「只」字(図1-a・c)と、同一説話内にある「亦返テ云ク」の「亦」字(図1-b・d)を示した(同叢書の『今昔物語集 三』)。鈴鹿本は『鈴鹿本今昔物語集』影印と考証—京都大学学術出版会によった。なお鈴鹿本は、京都大学附属図書館のホームページで鮮明なカラー画像を見ることが出来る。

(8) 同集成のこの箇所傍注には「どんどん近付いて来たので」とあり、訳としては無難である。

参考文献

- 青木博史(二〇一〇)「動詞重複構文の展開」(月本雅幸他編『古典語研究の焦点』武蔵野書院)のち『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房二〇一〇年に収録
- 小田 勝(二〇一五)「実例詳解古典文法総覧」(和泉書院)
- 亀井 孝(一九九四)「もしひと皮むくならば」(『大谷女子大国文』二四) 基になった講演は一九九三年に行われたもの由。のち『ことばの森』吉川弘文館一九九五に収録
- 小松英雄(一九七九)『いろはうた』(中公新書)
- 近藤 明・近藤仁美(一九九三)「現代語における「強調」の「動詞二十動詞」型」(『金沢大学留学生教育センター紀要』二)
- 近藤 明(一九九四a)「強調」の「動詞二十動詞」型」(『語源探究4』明治書院)
- 近藤 明(一九九四b)「中世後期・近世における「強調」の「動詞二十動

- 詞」型』、『国語論究5』明治書院)
- 近藤 明(一九九五)、「中世の「カイモチヒ」について―宇治拾遺物語第十二話を中心に―」、『解釈』四一・九)
- 近藤 明(一九九七)、「只局に局たてゝ」考』、『金沢大学教育学部紀要』四六)
- 島田泰子(二〇〇八)、「接頭辞ダダの成立と展開」、『二松学舎創立百三十周年記念論文集』)
- 島田康行(一九九六)、「今昔物語集における【ただ(動詞)に(動詞)】型表現形式の運用法―その意味的特質との関連から―」(筑波大『日本語と日本文学』二二)
- 関谷 浩(一九七二)、「ただあきに」の構成について―「ただ」は、はたして副詞か―(国学院大『国語研究』三二)
- 田口和夫(一九八〇)、「かひもちひ」を作る僧―宇治拾遺物語第十二話の解釈―』、『国語教室』七〇)
- 田中貴子(二〇〇七)、『検定絶対不合格教科書 古文』(朝日新聞出版)
- 福田秀一(一九六四)、「かひもちひ」考』、『解釈』一〇・六 のち『中世文学論考』明治書院 一九七五年)
- 山内洋一郎(一九八〇)、「ずちなくて」と「すべなくて」』、『レポート笠間』二一 のち『野飼ひの駒』和泉書院 一九九六)
- 山口康子(一九七八)、「に」を介する同一動詞反復形式の表現価値』、『春日和雄教授退官記念語文論叢』桜楓社 のち『今昔物語集の文章研究』おうふう 二〇〇〇年に収録。同書はこの形式に関する筆者の他の論考も多く収録している)
- 山田孝雄(一九三六)、『日本文法学概論』(宝文館)
- 藁谷隆純(一九八二)、「ただ―に―」』、『解釈』二八・九)